# 婦人と子ども（幼児の教育の前身）創刊当時

## のこどもと其頃の幼稚園の状況に就いて

東　基　吉

五十年前というと随分遠い昔です。然し静かに当時を追想しますと、共に仕事をしたり、勉強したりした今は亡き恩師や先輩や同僚達の風貌が、まざ〳〵と眼前に浮んで来るし、自分の成した事や、遭遇した事柄なども次々に浮び上つて来ます。今日になつて見れば何でもない分り切つた常識的な事柄が、其当時は非常に重大なことのように考えられたりなどして一人で微笑さへもしないでは居られないようなこともあります。

私がお茶の水の女子高等師範学校に奉職したのは明治三十三年の四月で、其前年高等師範学校を卒業、岩手県師範学校附属小学校主事に就任して居たのを、恩師黒田定治先生（女高師教授）の推薦で来つたのでした。始め先生のお話では、附属幼稚園に勤務するのだとのことでしたので、当時幼稚園教育のことなどには全く無知であつた私は、ちよつとガツガリしましたが、兎も角幼稚園主事の中村五六氏に会つて見なさいといふので、先生の紹介で本郷真砂町の中村氏宅を尋ねて面会しました際

「実は僕幼稚園のことは何も知らないんですが」

と言つた所、中村さんは

「いゝさ、日本中に誰だつて知つたものはありませんからね」

と言つて呉れたので、夫では幼稚園のイロハから勉強してか

ゝろうと決心して、三十三年の四月に女子高等師範学校助教授に任ず「幼稚園批評係り」を命ずという辞令を受けたのでした。

当時の幼稚園の組織は、満三年からの幼児を入園させて三組（一組四十人）職員は中村主事の下に保母が清水鶴（後下田義天類氏に嫁した）氏を筆頭に神門とも、稲石やす、林ふみ、松村久の五人、他に分室というのがあつて、これは三年から六年までの幼児を一組にした下層階級の為のもので、北野晴という保姉がこれを担任して居ました。其後本園の方は神晴稲石の二人が去つて其後任に雨森釧、武井綱技の二氏が来任しました。

夫から附属幼稚園には保母養成の機関があつて、保母練習科と名づけて居ました。高等女学校の卒業生を入学させ一年で卒業、保母の免状を得させたもので、私の赴任する前から出来て居て、其後何回か卒業生を出しましたが、大低一回の卒業生は十人以内で、皆地方幼稚園の主任保母として、招聘されて行きましたが、卒業生の中には相当確りした人も居て地方の幼稚園でよく働いて居ました。

何故私が此処に採用されたかというと、これは後から分つたことでしたが、当時学校内での附属幼稚園の評判が甚だかんばしく無かつたようで、つまり幼児教育研究機関として一向何もして居ないじやないかというようなことが、時々言われたように思われた。尤も附属高等女学校だつて、附属小学校だつて格別女子教育や児童教育上の研究など発表されたとも思えなかつたのですが（附属高等女学校主事は篠田利英氏附属小学校の方は高浦丈夫氏）何に致せ、お隣りの高等師範の附属小学校（神田一つ橋所在）では樋口勘次郎氏などが音頭を取つて新らしい教育主義だとか教授方法などを盛に機関雑誌に発表したり、所々で講演したりして居ますし一方此頃は又児童研究ということが盛んで、高島平三郎氏が雑誌「児童研究」を出して居り、殆んど全国的に児童研究の熱が昂まつて来て居ました。そうした形勢の下に在つて、女高師の附属は何も発表しないし、自然影が淡いように見えたのです。尤も幼稚園が特に評判がかんばしくなかつたように思われたのは、一つは中村主事の性格からも来て居たようです。中村さんは実に立派な人格者で、誰にも親切で、腹にわだかまりの無い、竹を割つたような方で、私はいつも尊敬と親しみを感じて居たし部下の保母達にも尊敬されて居ましたが、一面

何方かというと少し社交性に乏しいようでよく人を皮肉つたり、いやがらせを言つたりします。そこから人に誤解されたり反感を持たれたりする、夫が自然中村さんの主宰する幼稚園の方にも響いて来たようにも思われます。そこで、幼稚園が一向何もやらんじやないかといわれるのに対して中村さんは「部下の保母達は皆女で、日々保育の仕事に忙殺されて居るのだ、研究などやる暇はありやしない、研究をやれというなら我が輩の相棒に一人確りした男を入れて貰いたい」というようなことを言い出して、結局この提案がいれられて其結果私が採用されることになつたのらしい。中村さんのこの提案を強く支持されたのは、学校職員の中でも私の恩師黒田教授であつたろうと思われます。

私が赴任した頃、附属幼稚園で、保育終了後附属小学校や高等女学校、中学校へ転入した児童の学業成績を調査して其統計表を造つて居まして、私が来てから其仕事を私が引き受けてやることになりました。これは他から入学した児童の成績と比較して、幼稚園保育の効果を実証しようという計画であつたようです。所が幼稚園出身の児童が悉く、他の児童に比べて学業成績が優秀であるべき道理がないと思つたから、私がやつて見て二三年経てからやめて仕舞いました。がこれも、幼稚園が何もして居ないと言われる夫の対策の一つであつたようです。

これは学校内部のことですが、夫にも増して甚だ厄介千万なことは、一般幼稚園に対する世間の批評で、これが又多く教育者から出たものであります。当時私の尊敬して居た一人の知名の教育者など、直接私に向つて幼稚園不必要論から有害論までも持ちかけて来ます。其当時の不必要論というのは下層階級の家庭に取つては、幼稚園は要るかも知れぬが、よい家庭殊に母親が教育的意見を持つて子供を育てゝ行く家庭に取つては不必要である。殊に三歳から学齢までの幼児は母の膝下で育てるのが自然なのであるといふので、この議論は西洋でも相当あつたようです。有害論は主として保育の方法から来て居るのでありまして、前に挙げたバルンバム氏の論評の中にも若干見えて居まして、これは相当程度御尤もな議論で、私が始終考えた点もこゝに在つたのです。内憂外患とはまさに此頃の附属幼稚園の状態であつたでしよう。

こんな状勢の時、とも角私は附属幼稚園職員室の一隅に私の席につき、夫から毎日保母諸君の保育見学、教生諸氏の保

育練習参観に日を消しました、保育事項は遊嬉（遊戯の戯はいけないという中村さんの意見で嬉という字を用いて居た）唱歌、談話、手技の四で、各々三十分ずつに時間を配当して、各組時間表を作つて居ました。

当時幼稚園に関する日本の書物は文部省から出した（確か和本三冊本）ものと中村さんの幼稚園摘葉（一冊本）夫に竹早町の女子師範学校長であつた林吾一氏の一冊本だけで、何れも米国ものゝ飜訳のようでした、其他に職員室に在つた書物は全部アメリカ版のもの許り、夫に雑誌はこれも米国出版の Kindergarten Review と Kindergarten magazin の二種が毎月来ました。夫で毎日そんな書物や雑誌を読破して、幼稚園に関する知識を収得することに努めました。フレーベル氏の「人間教育」や「幼稚園教育」という書物もこの頃始めて読みましたが、丁度育成会の石川栄司氏が、教育学書解説叢書を出版するからというので、私がフレーベル氏の「人間教育」を解説したのもこの頃でした。

私は当時流行の児童教育にはさつぱり興味を感じて居ませんでした。一度流行につれて「児童研究会」（校庭に大きな藤棚があつたので、夫に因んで始めに「藤蔭児童研究会」と名つけた）というものを職員五六人で造つて見ましたが、誰も関心を持たなかつたものと見え其儘立ち消えて仕舞いました。児童研究などいうよりは私の目的は近代科学に基礎を置く全教育体系の最初の一環として幼稚園研究と其改善とに在つたのでしたが、米国から取つたどの書物を見ても、前記の雑誌を覗いて見ても、どれもどれも皆一律にフレーベリアン、ドクトリンを祖述演繹したもの許りで一向参考になるものがないのに失望したのでした。然し其頃の保育の方法に付いて私の最初に気付いたものは所謂手技ですが、其取り扱ひ方が頗る神秘的で一寸外部の人には分り兼ねるやり方でした。手技というのは所謂恩物と作業 Gifts and occupation で、これはフレーベル氏の哲学的構想から割り出して作られた玩具で、御承知のように積木と小板片と箸（真鋳の細い棒）と豆かきしやごの四種で、立体から体の一部の面（板、面の一部の線（箸）線の一部の点（豆）という風に全体から部分に、具体から抽象にという風に作られて居ます。そしてこの四種の恩物は別々に取り扱われねばならぬのであつて、決して混ぜて使わしてはいけない。板は板で箸は箸で豆は豆と夫れ〳〵独立して平面上に排列させる。板や箸を立体的に

例えば板を塀にしたり箸を旗の俸にしたりしてはいけないのである。作業の方は反対に点、線画、体といふ風に部分から全体に、抽象から具体にといふ風に組み立てられて居る。フレーベル氏はこれに依つて幼児に、この全体から部分に、具体から抽象にといふ天地間の自然の法則を会得させようとしたのであるということです。フレーベル氏の恩物に関する其他の理論の全体系を、当時の保母達が、皆理解して居たとは思えませんが、何処の幼稚園でもこのフレーベル式の取り扱い方を金科玉条として忠実に守つて居たようです。神戸にエー、エル、ハウという米国の女性の経営して居る幼稚園があつて、私は行つたことは無かつたが、此女史などはフレーベル主義の忠実な実行者であつたようで、フレーベル氏の「母の遊戯」という本を訳して出版されて居ました。

御承知の通り、幼稚園は一八三七年フレーベル氏がブランケンブルグに創立したものでしたが、同五一年プロシヤ政府から、フレーベル式幼稚園の設立が禁止され、其翌五二年にフレーベル氏は瞑目したのでしたが、夫にも拘わらず一八五四年以来全欧羅巴諸国に幼稚園の普及発達を来したのは全くマーレンホルツビューロー夫人が、殆んどフレーベル氏の教育意見に宗教的感銘と熱情とを持つて、各国に遊説した結果だといわれて居ますが、我が国幼稚園関係者で、当時フレーベル氏の「人間教育」や「幼稚園教育」(大分難解の書物です)を読破したり感銘したりする人は一人もなかつたようです。が、幼稚園が他の教育体系から離れ近世科学を無視したような格恰で、米国あたりでもやつて居たのは、フレーベリアン、ドクトリンに対するこの宗教的な熱情と感銘から来た結果だと私は考えて居ました。私はこの恩物の取り扱い方に付いて、意見を出して見たことも時々あつたが、「どうも旧慣墨守の力の強い保母さん達は一向顧みようとはしませんでした。若い保母さんの中には私の意見に賛成してくれる人もあつたようだが、年季をかけた古い保母さん達に遠慮して口を出さない。

丁度其頃近着の Kindergarten Revew にバルンハムという人の幼稚園保育法に付いての論文が出たのを読んで大に参考になつたし、又イギリスの心理学会から発行せられた Psychological Seminary という雑誌に一会員の発表した幼稚園改造論 Reconstruction of Kindergarten という相当長い論文は綿密な調査や統計に依つて現在の保育法の非教育的

な点を指摘して居て、私の断片的な意見に科学的根拠を与えてくれた気がしたのでした。

次に幼児に歌はせる唱歌だつたが、これは極めて古典的なもので、吾々にさへ分り兼ねるような歌詞を古いメロディーで歌はせる。一例を挙げると

民草のさかゆる時と　苗代に
水せき入れてみしめなば　ゆたに引きはえ
八束穂のたりほの稲の　時あらむ

と云つた類で、この歌曲に手をつけて踊らせるのである。子供は歌詞が判ろうが判るまいが又メロディーが多少六ケ敷ても、歌わせれば喜んで歌うものだが、教育的に考えれば歌詞も曲も子供らしい子供によく判るものにしたいというのが私の考えで、時々妻（東京音楽学校卒業東京府立第一高等女学校教員）と相談して、簡単な童謡を作つて職員会議に持ち出したのでしたが、何とか乎とか批評されて結局採用されない。

所が当時楽界の麒麟児と呼ばれた滝廉太郎氏（妻よりは二年後の音楽学校卒業）が拙宅にやつて来て「幼稚園で唱わせる唱歌を作わうじやありませんか、奥さんが歌詞を作つてくれゝば自分が作曲するから」という話で、とう〳〵夫が纒つて「幼稚園唱歌」という名で共益商社から出版されたのが明治三十四年で、この本の中の一、二は他の人の作もあるが大部分は妻の作歌で、鳩ぽつぽだのお正月だのといふ唱歌は、今以て唱われて放送されたりしています。とも角、これで子供らしい唱歌が出来た。麻布の何処だつたかに、矢張りアメリカの女の人のやつて居た幼稚園があつて、いつか参観した時、六ケ敷い讃美歌を唱わして居たから「もう少しやさしい子供らしい唱歌を唱わしたら」と一寸不用意に言つて仕舞つた所其婦人が「そんなのがありますか、作つて下さい」と反撃されて閉口したことがありましたので、この唱歌集が出来て、やれやれと思つたのでありました。然しこれは附属幼稚園ではあまり歓迎されなかつたようでした。一つは矢張り古い保母さん達が、昔の儘のものを墨守する傾向が強かつたこと〻、もう一つは新入りの私が事毎に新らしい意見を持ち出すのに対する反感からでもあつたからかも知れません。けれどもこの唱歌の出来た当時、二葉幼稚園を経営して居られた野口幽香女史……この幼稚園は月謝といつて徴収しないで、幼児が登園すると其日に二銭づゝ持つてこさせるといふ下層

階級の家庭に対する思いやりの深い方法を取つて居ました…
…や、女高師の音楽教師であつた吉田信太氏などは、丸で天来の福音のように喜んだり賞讃してくれました。

伊沢修二先生が丁度隣りの高等師範の校長であつたので、或日婦人と子どもの往訪記者として先生を訪ねて、先生が女高師時代の幼稚園のことを伺つて見ました折り、其お話の一節に次のようなことがありました。

「何しろ附属幼稚園が出来たのは明治九年で其頃は何も彼も分らずにやつて居たのだね、唱歌などもてんで分らぬ六ケしいもの許りだつた。其処へお雇い教師のメーソンがヴイオリンを持つてやつて来て、ちょう〳〵を弾いてくれた所がさあ子供らは大喜びで、ワアツと、メーソンの膝に集まつて来たものでした。」

この時始めて、ちょう〳〵ちょう〳〵菜の葉にとまれの歌詞は伊沢先生の作歌であつたことを知りました。

夫から幼児に聞かせる談話ですが、これは庶物の話と人事の話とに分けて居ました、庶物の話というのは蝶々や蜂や蛙などの動物とか植物に関するお話で、子供の理科的知識を啓発するのが目的です。人事の話は所謂童話ですが、さて困つたことには庶物に関する話の材料として蜂や蝶々の舶来の立派な掛図はありましたが、童話の方には夫がない許りか、童話其のものさへ、小波さんが博文館から日本昔話…桃太郎やかち〳〵山などを出して居られる丈であつたので、一向見当らない、夫に今日では子供の絵本絵雑誌などが何処の書店にも汎濫して居るのですが当時そんなものはさつぱり見ることが出来ないのでした。そこで私はグリムやアンデルセン其他日本橋の丸善に行つて西洋の童話の本をいろ〳〵探し出して、適当なものを片端から飜訳したり飜案したりしたものです。

名前は忘れたが其頃私に「絵ばなし」という子供相手の色刷りの絵の小冊子を出したいから編集してくれぬかと云つた人がありましたので、私は喜んで承知して、或る女学校の絵の先生を頼んで絵の方を引き受けて貰いました、そして何号かまで出しましたが、一つは私の編輯方法もまずかつたのかも知れませんが、五六号出してやめになりました。其時私の思つたことは、どうも日本の絵かきさんは動物の絵が下手だし、子供の絵もまずいということでした。子供相手の西洋の

動物の絵を見ると、人間的表情を巧に猫や犬や山羊などに写して居て、夫等の動物が丸で人間のように笑つたり泣いたり話したりして居るかのように描かれて居ますが、日本の絵かきさんには夫が出来ない、夫に子供の顔や表情が旨く描き出されません、夫で折角期待したこの絵雑誌もあまり部数が出なかつたので短日月で潰れて仕舞つたのでした。

次に遊嬉ですが、これは共同遊嬉と自由遊嬉とに分けて居ました。前者は楽器に合わせたり唱歌しながら行進したり環になつたりして遊ぶもの、後者は庭で自由に砂遊や鬼ごつこや綱引などして遊ぶのです。この方の仕事には私の手はまだ届きませんでした。

が、とも角幼稚園の保育方法や保育事項などに付き改善に就いての幾らか纏まつた意見が出来ましたので、何日の発行でしたか、神田小川町の同文館発行の雑誌「教育学術界」に発表しました。当時東京市内小学校教育界の大御所を以て自ら任じて居た多田房之輔氏（氏は神田で幼稚園を経営して居り、又保母養成所を設けたり、東京府教育会開設の保母伝習所の所長をしたりして相当幼稚園には功労のあつた人で日本の小学教師という雑誌を出して居ましたが、其文を読んで「はあ、これはあなたの幼稚園卒業論文ですね」と云われたことがありました。

前に記した如く、幼稚園に関する日本文の書物が米国本の簡単な翻訳書が二三ある丈けでしたから、明治三十四年「幼稚園保育法」を著述して日本橋の目黒書店から出版し次いで師範学校女生徒の教科用書として保育法教科書を著述して矢張り同書店から出版しました。明治四十年に同文館から教育大辞書の出版がありまして、其中の幼稚園に関する一切の項目を私が担当して記述しました。明治九年始めて附属幼稚園が創設（尤む京都市では其以前に設立されて居たという話です）されてから、こゝに始めて翻訳に依らない日本文の幼稚園に関する著述が出来たのであつて、私は自から私に満足を覚えて居るのであります。

其時分のことでしたと思いますが、本郷竜岡町の私の寓居に岸部福雄君が尋ねて来ての話に、

「大阪では此頃東式手技研究とか云つて保母さん達がしきりにやつて居る相ですよ」

といわれたので「へえ」と云つた切り何のことか分らなかつたのでしたが、其前の年が前々年かの明治三十七年の夏大阪

の愛珠幼稚園での、三市連合保育会（大阪、神戸、東都の三市、会長は大阪府女子師範学校長大村芳樹氏）主催の保育法講習会に出席して私が講演した手技の取り扱い方に付いて保母さん達が引き続き研究して居るのだなと判つて、自分の話の反響が相当にあつたことに愉快を感じたのでした。

因みに記しますが愛珠幼稚園は大阪でも有名なもので、木造ではあるが工費八万円（現在の金に換算すると約一千万円以上でしよう）と云うので、東京でも流石は大阪だなと呼びものになつて居ました、私が講演に行つた時、其幼稚園の肝入り役は塩野吉兵衛といつた方でした。

× × ×

正しい幼稚園教育思想を成るべく早く一般に普及させたい念願から、いろ〳〵雑誌に執筆したり著書を書いたりしたのですが、「育成会」から発行する「教育実験界」という雑誌記者に渡辺隈川という人があり、其人が私の話したリーベンシュタエンに於けるフレーベル氏とマーレンホルツビューロー夫人との会見記事(Remiriscence of locbel の中の一節)を絵にして水彩画の大家渡辺審也氏に描かせ実験界に二頁大の口絵にして付けたのなども、今では嬉しかつた一つの思い出です。

然し、所々で講演したり著述をしたり余所の雑誌に執筆したりして居る丈けではこの念願は達せられません。自分の手に研究なり意見なりの発表機関を持つて居なければなりません。其処で考え付いたのは当時存在して居たフレーベル会…これはいつ創立されたのか知りませぬが、私が来つた頃毎年一回総会を開いて会長高嶺秀夫先生（女高師校長）の開会の辞や保母さん達の研究発表などがあつたようです。…の機関雑誌を発行することでした。所が雑誌発行に付いては先ず金が費るがフレーベル会には無論一文だつて金が無い。それでこれは本屋にやらせるより他に途がなかつた、幸い、日本橋に金昌堂という書店があつて、其店の主人が自分の出版書籍の広告機関として雑誌を発行したいと思つて居た所であつたので、其主人と話し合つて其処から出版して貰うことに話を決めた。そこで私は明治三十四年のフレーベル会の総会にこの機関雑誌発行の案を提出しました。会費月十銭で毎月雑誌一部づゝ配布される丈けで別に会員の負担になる訳でもなし又会の金（無論無いのではあるが）を費消する訳でもないのだから、この提案は異議なく可決されました。

そこで雑誌の名を何とつけるかという段になつて中村さん、盲唖学校長の小西信八先生、黒田先生、多田房之輔氏などを幼稚園に集まつて貰つて相談しました。最初の私の考えでは幼稚園の機関雑誌だから純然たる保母育専門の雑誌にしたいのでありましたが、夫では一般に売れないから書店では承知してくれません。可成一般向にして家庭でも教育者の間でゞも読まれるものにしなければならないということになつて、其処で雑誌の名前も「婦人と子ども」ということに決めたのでした。これはフレーベル氏が「子供をよくするには子供の教育と共に女子殊に母の教育が大事である」といつて女子教育を重んじたという所から、この名前を付けたものであります。

夫から雑誌発行の条件は次のようでした

1編集一切は私が担当する。

2紙数は一部菊版八十頁とし定価は十銭とする。

3発行部数の中三百部は書店からフレーベル会へ納付する。

これに対し会からは実費一部五銭として三百部代を仕払う

（当時フレーベル会員は百五十名か精々二百名位であつたと思いますが、会から夫れ夫れ関係者の知名の人達に寄贈しなければなりませんから三百部を納めて貰うことにしたのです。）

4残りの部数は書店で発売し売れ高に応じて印税を会に納める。会はこれを寄稿者への原稿料を支払い、残つた分は会の収入にする。広告料は書店の収入とし、会の広告料は無料とする。

まあ大体こんな所でいよ〳〵「婦人と子ども」が生れ出ることになりましたが、こゝで面白かつたことは雑誌の表紙の問題です。名前の文字は高嶺会長に揮毫を願うことにし、表紙の意匠は荒木十畝（学校の絵の先生）氏に頼むことにしまして、さて出来上つた。所が金昌堂の主人がこれを見て苦い顔をして首をかしげる「どうもこれでは絵も字も渋すぎて一般向がしません」と云います、実は私もさう思つたのです。十畝氏はゲーテの色彩論など持ち出して緑色の地に黄色のは、その蔓と葉とを模様化し下の方に白ぬきに撫子をあしらつて、夫で母と子とを表徴してるのですが、何分渋くつて地味でパッとしないです。夫に会長は達筆なのですが、惜しいことには雑誌の表題の文字として素人向きがしません。私も弱りましたが、今更書き直してくれなどとは無論云えません

し、まあ〳〵と云つて金昌堂を承知させて仕舞つたのでした。

そこでいよ〳〵「婦人と子ども」創刊号の編集に取りかかつたのでしたが、何分私に取つては始めての仕事であり、今日でこそいろ〳〵各方面の雑誌が花園に百花の咲き乱れたように店頭に広がつて居ますが、其頃は子供の雑誌では確か博文館から出して居たと思う小国民とか、同じく婦人雑誌では「女学世界」、石川正作氏の店から出して居た「女子の友」、夫にもう一つ何処かゝら出して居た「明治の家庭」位のもので誠に寥々たるものでした。其処へこの道で全く無経験な私が、一人でやろうというのですから、今から考えると一寸無鉄砲のようでした。が、とも角やらねばならぬ。一般向きとは云つても「女学世界」や「女子の友」などゝ違つて、何処までもフレーベル会の機関雑誌として、幼稚園の研究改良の意見の発表、婦人と子どもの教育を主眼とした特色を持たねばならぬという考えから、始めの幾頁かを子供の領分とし、其処には私が丸善からあさり出した洋書から得た短篇の童話を四号活字でのせ、其他子供らしい記事に何頁かを割きました。そして会の記事や幼稚園教育に関する一切の事項は全部私が執筆し、母親欄の記事は専ら保母の林、松村両女史に依頼して書いて貰い趣味を主とした雑録欄は私の他に一、二の高師の学生に書かせ其他は文苑欄と共に一般の寄書に待つことにしたのですが、此方から頼んで書いて貰うものには原稿料を出さねばならぬ。其原稿料は凡そ一頁四十銭に決めて居ましたが、これが中に急届で、時には粗品で間に合わせることもありました。今日文壇で名を知られて居る野口雨情氏は当時まだ早稲田の学生であつて時々文苑欄に作詩を寄稿してくれましたが、学生とはいへ、中々立派な作品で、他の寄稿の文は大低手を入れたり没にしなければならぬのに、雨情氏の作品にはいつも〳〵感歎させられたものでした。嘗て原稿料の代りにビール一ダースを届けたことがありましたが、其後、今から二十幾年か前、或雑誌者が知名の作家達に、最初に得た原稿料を聞いたことがありました時、野口氏は「婦人と子ども」に投稿して私からビール一ダースを贈つて貰つたことを云つて、これが自分の得た最初の原稿料といえるであらうなどゝ話して居たことがあつたようです。

夫に一つ編集上で困つたことは、雑誌の挿絵でした。一人

二人知り合の画家は挿絵など描かないし、已むなく婦人の絵かきさんを紹介して貰つて、子供欄に描いて貰つたのでしたが、それがどうも私の気に入らない。然し発行期日が迫つたので、已むなく其儘挿入して原稿と一纒めに活版所に送りました。活版屋は神田橋の近くに在つた熊田活版所でした。

かくしてとに角幼稚園教育の発表機関が出来て、明治三十四年やつと其創刊号が発行されたのでした。創刊号ではあり、女高師附属幼稚園からの発行ですから、内容も相当豊富にし、装いも華かにして出発させたかつたのですが、其方に経験の無い私ではあり、実費一部五銭といつた貧弱な支出では、口絵の写真版一枚ですら附け兼ねるのでした。夫で漸く発行された第一巻第一号は、私自身が見ましても、如何にも田舎臭くつて垢抜けのしないものでしたが、夫でも「あゝよく出来た」などゝお世辞を云つてくれる人も多かつたが、私自身としては内心甚だ物足りなくうら恥かしくさへあつたのでした。

其中号を重ねるに従つて、漸やく体裁も整つて来るし、雑誌の少かつた時分のことゝて、隅から隅まで読んでくれる人も多かつたし、家庭でも相当喜ばれて居たようでした。所でこの雑誌は保証金の納めて居ないものでしたので、何号と何号の発行の時でしたか、二度ばかり警視庁から呼び出しを受けて、其中の記事に附いて厳しいお叱りを受けました。其記事の一つは、確か松村久さんの書かれた浅草の「子供を借りて来て物貰いをする乞食」のことであつて、成る程これは学術には関係がない、見方に依つては警察の不取締を皮肉つたようにも取れないこともないから警察の怒るのも無理はなかつたでしょう。然しこんな所で争つて向うの心証を害するのは、結局損だと思つたから音なしく「今後注意します」と云つて、二度とも引き下つたのでした。警視庁に呼び出されたなどということが、会長高嶺校長に知れたら大変だと思つてこのことは私は誰にも話しませんでした。が、学術雑誌として保証金を納めない雑誌は不自由なものだなあと感じたことでしたので、何とかしたいと考えはしたものゝ五百円という大金は其頃出せもしないし、もう、発行所の本屋さんもそろ〳〵嫌気を催うして来たようですから、そんな金は出しもしなかろうしと思つて、其儘にして、つゞけることにしました。

書店がいや気になつたというのは、元来金昌堂は専ら教科書の出版発売をやつて居るので其広告機関としては、婦人、子供、家庭向きの、このような雑誌は不適当なのです。夫で創刊の前に一二回大々的に新聞紙に広告して、四五千部の発売を見たのですが、其後さつぱり広告をしないので、発売部数もだん〳〵減つて行き、一向利益にならぬという所からとう〳〵書店から解約を申し出して来たのでした。それは何巻の何号からであつたか忘れましたが、其頃はもう編集に付いても自信が出来たし、費用の収支も会員外に千四五百部も売れゝば結構やつて行けると思いましたので、書店の解約申し出でに快よく応じることにして、いよ〳〵純然とフレーベル会のものとして発行発売することにしたのです。

さうなると私も一生懸命です。自分で往訪記者にもなり、広告取りにもなり、活版屋への使い走りから雑誌の包装発送何から何まで一人でやらなければなりませんでした。或る夏休みのとても暑かつた日、当時神田の一ツ橋に住まつて居たのでしたが、中村さんが手伝いに来てくれて、氷漬けにした御飯を食べながら、汗だくになつて二人で包装して発送をすませたりしたこともありました。発行部数は減りもしませんでしたが、増しもせずに、費用の収支も先ず順調に行きました。

其頃フレーベル会々員は何人位あつたかは記憶しませんが、全国幼稚園の数は明治四十年の統計年鑑に依ると、二百九十五で、保母の数は七百八十三人でありましたが、勿論会員はこの中の何分の一かであつたでしよう。

夫から二三年経つてから私は附属小学校の批評係を兼任することになつて、其方に多く時間を取られるようになつたので、幼稚園へは和田実君という神奈川県師範学校の卒業生で、以前中村さんが其学校の校長時代の教え子であつた人が這入つて来ましたので、「婦人と子ども」の編集なり事務なりは一切和田氏にやつて貰うことにして、私は雑誌から手を引いて仕舞つたように記憶して居ます。

「婦人と子ども」を育てゝ行く上に付いては、黒田恩師を始め、本校職員の二三の方から深い同情と激励とを受けましたが、別して東京盲唖学校の小西信八先生から何かと御親切な忠言を戴きました。こゝに附記して今は亡き先生方の霊に対して深く感謝の意を表する次第であります。

さて明治四十一年に私は地方の師範学校長に転じ、中村さ

んも其後奈良県師範学校長に転任され、安井てつさんが幼稚園の主事をやつて居られたようでしたが、倉橋さんのお見えになつたのは、安井さんの後かと存じますが、其倉橋さんの手で「婦人と子ども」も「幼児の教育」という名実共に立派な機関雑誌となり、こゝに「婦人と子ども」発刊以来五十巻を重ねるに至つたことは誠に喜に堪えぬ所であります。こゝに五十年前の思い出を記しましたが当時幼稚園に在園した男女の幼児達で、今生存されて居られる方々は、何れも六十近いよいお年になつて居られる訳です。実に五十年一夢の如し、この稿を草するに当つて、アルバムをくり広げて、其当時の先生や保母さん達の写真を眺めながら、暫らくは懐旧の念に打たれるのでありました。

（了）